

# 渡世物知り帖 その一

## 地下夕比の話

日野善太郎

「おっさん、どないや。まだ覺こてるんか」  
「何せ、いきなり。アホとちやうか。覺が止  
まったら死んでまうやないか。私かて覺ぐら  
いこてるゆい」

「こせけど、この前あうたとき、こつ不景氣  
や。たら、こまいに息もされんようになる言  
うてたやろ、もうそろく、止まってることや  
ないか思つて」

「それは、あんときさう言うたんは言葉のア  
ヤいうもんや。どこの国に息せんと生きてる  
もんがあるかいな」

「ハハハ、まアさう死にないな。どうせもろ  
化けるくらい生きてるねんから、息ぐらい止  
まったかて、何のことないやろ」

「何ちうことをゆかしくさるねん。ホンマに  
口のきき方もちらんぬやな」

「それや、その口のきき方言うぜつや。つい  
さっきもそれでおだちとケンカしたんや。わ  
いは無口で、口下手な方やから、口から先に  
生まれたようなせつにはかなわねん」  
「口下手はともかく、私にはお前が無口とは  
思えんけどな」

「さう言のんと話を聞いてえな。ついさっき  
道でおだちと会つたんや。どこの行くねん、  
いうから」ジカタビ買ひに行つてこせ、言う  
たら、アホ、ぬかしくよんねん。腰立つやない  
か。ジカタビ買ひに行くのんが、何でアホ  
やねん。言うてやたら、お前は物を知らん  
ぜつや、あれはジカタビで無つてチカタビと  
言うもんや。と、こつでんねん。そんなも  
んど、ちでもええやんか。ジカタビ言うたら  
店で売つてくれんか。ちやんと売つてくれん

せんか。それだったらシカクビでも、チカクビでもかまへんせんか。どう言うてやったんや。あつさんどない思う。

「そらお前のきつ通りや。ハルーン、お前の反だちというのには関東の人聞かぬ。」

「へー、よう判るもんやね。あつさんそこがくらハツケも見るのんか。」

「いや、ハツケやウラナイはようせんけど、言葉は國の手形いつてな。言葉はナマリでせの人の生まれの見当がつく。たとえば関東から東北の人はチカクビと言つが、関西の人間はジカクビと言つな。」

「成程、そうや。たんかま任せ。いえね、そのガキがわがすのには、チカクビでもジカクビでもどっちでもええという事はあらへん。地下足袋という字は、チカクビとこか誤まおへん。ジゲクビとは誤れてもジカクビとは誤まれへんべ。お前は學のないうつや。どないだ。勝立つやないか。」

「それはお前さんの反だちの言うのはいりウツまな。地下足袋はチカクビと誤んだるかかりウツまな。」

「へー、や。たら思つたら、その相手はどこらにいてへんかった。」

「それはよかった。そんなつまずいたことでドヅキワイとしても、一文の恨にもならん。」

「そらまどうやけど、わい口惜うてたらんぬん。いや、だ、チカクビとジカクビとどっちがホンマなんやろ。な、あつさん。」

「そんなもん、どっちでもええのんや。どっちも正しい。このソウいうてこそたんでほいもいりや。お前のオカカキはどなんにいか。地下足袋は地連はジカにはくよ、おジカクビ言うのんがホンマや。そのお前さんに大州は熊本あたりではジキクビと言うてるし、鹿児島ではそれお前につまんでジキクビなんて言うてるや。」

「そんなら何か、チカクビがまちがいで、ジカクビが正しいんか。お前の先生。」

「ま、黙つてお聞き、ホクビの産にゴムをはりつけて今よりものが出来た力は明治の終りで、今からやっと七十年ほど前だが、このときと前からやったジカクビに地下足袋の

ツにはかかってる。」

「ア、あつさんは誰の味方だわん。それからそのガキがね。家の中はくのがオカクビで、外はくのがチカクビや、その位のことはよくおぼえとけ。ぬかこよさかい、こちちもめんねになつて。そんなら何か、チカクビというたら地下鉄工事でけくのが、家の中ではくのにオカクビなんておかといやな

いか、お前こそ知つたふりしていいかげんなことぬかすな。言うてや。たんや。ところが相手を買けてへん。東京あたりでは風呂の

上り湯のことをオカキといふくらいで、オカキといつても履といふ意味にやない。そんなことも知らんのか。て、反対にやりこめられ

てグウの音を出えへん。無口な者は堪やなアツてつくづく思ひましたんや。」

「それだけ喋って何が無口や。それからどないした。」

「どないもせえへん。ロムもどつてそかなぬんから、口端にまぎれに「オカカリ」コトづいたんか。」

「命き当てたんや。それがチカクビとジカクビと誤互する原因になつたわけや。」

「うーん、いらん。こしくさつて、どこりといつや。おかげでいりや。お前のオカカキ

そなたや。んけ、その野郎見つけ出して一かおかりといつたらやないけ。」

「七十年も昔の話や。今更、お前さんが目おいてもどつたらんか。それと、その人がて、どおまであつた。お前さんと区別するたために

新しいタビに新しい名前をつけてようと苦心した。たんだから、お前さんが文句を言つた場合

口には通らぬ。」

「そらまた、おまけや。そんならおつさん、もともと履の中ではくたを土の上ではくよつになつた。だからジカクビ言うのやな。それ

や、た。はじめはただくたを言つてたのをジカクビが出来たんで、家の中のをオカクビと言つたになつたんか。」

「そうやると思つけどな。ただ、オカクビ

というの東京、千葉あたりの言葉や。くたをクビはるともと家の中でくるとんやない。」

「ええッ！ ぬあいつたり、この言うたり、話かやぞこくなつておなわんの。あつさんモ一ロクして自分の言うことが判らんよつになつたんと違つか。せ、ぱり急がよまりかけてんのやろ」

「口の悪い奴やな。コレ、ゆ、くり説明してあげるやれい、ま、お系でもおのみ」

「サテ、大昔のタビはタビクツとも書つてクツの一種やった。日本人も大昔はクツをはいたんやな。クツだから勿論、土の上ではいて墨の上でははかなかつた。ただ、大昔の家は土間ばかりで板の間はない。そのころのタミといふのは今のタタミとは違つ」

「ホラ、またヘンなこといふぜろ。土間ばかりの間に板でタタミがあるんや」

「大昔、奈良時代には動物のことを、ムシロある、コモでも、毛皮でも、みんなタタミと言つたんや。ところがタビは多分とか、單皮と書いてな、手からそれ出まらうように、鹿

「つまりタタミの生活と板の間の生活では違つといふこ、ちや。昔の皮タビはゾーリヤワラジをけくときの下げきにも使われなく、靴のようにジムにもはいとつたんやが、江戸時代になると、徳川おかげで皮の輸入がなくなつてしもつた。ちやうどそのころから木綿の生産がはえて値が安くなつた。そこで皮タビのかわりに木綿のタビが作られるようになったんや。ところが、この木綿のタビはあく手に入る。タタミの生活にもあつたりや。今まで裸足で歩いてきた人も、みなあらそつてタビをはくよつになつたといふわけや」

「タビにも歴史があるんやぬえ」

「せういふこ、ちや。もう少しくわしい話をすると、江戸時代の木綿タビは初めは足首から上の長い筒タビで、ヒモで結ぶよつになつていて、それがホリソになり、角製のソルゼになり、明治になつてからそのソルゼも多クユウになつたんや。今のよつに筒のないタビになつたのも、美物やハカマの伊兵衛からアホソをはくよつになつた明治になつてからや」

「なごの一枚の皮でできていたんや。そやさかい今でも東北の人にはタビのことをタンビ言つわけやな。単皮の字はタンビと読めるぜろ」

「へー、ホソマかいな」

「何を私がウリいの人ならんのや。とこころで平安時代になると、家が板間形式になり、タビも改良されて板間にはくよつになつたといふわけや。そのころになるとタタミも動物のここと無つて今でいうつスベリのことを言うよつになつたんやな」

「なるほど、いろいろあるんやな、そやけど向でタビの誌に、せうタタミのことが出てくるんかいな」

「タタミといふのはな、昔は雪のある時に出して使つたもので、んだんはたたんでもなつておいたからタタミと言つたんや。今のよつなタタミが出来たのは鎌倉時代の終りのころで、富洲の奴でしか使われなかつた。一般の人に普及したんは江戸時代の中頃いふことや」

「それで、そのタタミとタビと、どういふ関係がおまんぬん」

「今でもホレ、お百姓さんや、土着のはくジカタビは筒がなく、威や大工のはくトビタビは十枚ソルゼとか、十二枚ソルゼといふて筒が長く出来ていふぜろ。あれはな、威や大工は七分ソルゼをはくんで、筒の長いタビの片が便利だからや」

「そやけどおれは土着するときも十二枚ソルゼをはいてまっせ。その方がカッコええし、それに第一、今ごろが縫工な三枚ソルゼなんでおいてる店ないのんちがうぜろか」

「たしかに十二枚ソルゼのタビは三枚や五枚のソルゼより見た目のカッコはええぬな。しかし土着仕事、まゝ入ればんかするには弱くて永持ちせんぜろ。そこへゆくとソルゼの少いタビはゴムが厚くて、座が丈夫に出来てるさかい、土着仕事にはあつてこいや」

「それや、たらおれは長グツはくぬ。長グツなら水の中にも入れるし」

「長グツもいれが足が重くて疲れるぜろ。まア、せういふことは好き好きかのう」

「それはどうと、今までのあ、さんの話を早

〈労務者渡世〉販売店

かとう シンベンガード東  
 (中) 銀座副安い屋並び  
 千石書店 114ソコニュー大阪東  
 いい食堂 けいさつうら  
 御握り屋 三角工、西  
 大阪労働 中島朝ビル下  
 長瀬書店 山谷清川プロ屋の並び

次回にたくさんの

原稿を手に紙を送って  
 労務者渡世 第24号  
 一九七八年一月一日発行 定価100円  
 大阪市西成区ササキ茶屋3-6-35  
 「御握り屋」宛付  
 労務者渡世編集委員会

編集後記

不景気存亡にあめでどうぞどうかと思っけれど、浮世のきまりとして新年のごあいさつ、ことしもしもどうぞよろしく。おたがいできるだけ病気をなさないようにことしもしもやりましよう。  
 「渡世賞」はごらんのご通りでした。感想と批評をたくさんきか

せて下さい。  
 この号、予定よりおくれてしまいましたでしたが、ゆが「御握り屋」では逆に予定より少々早く二番目の女児出産(十二月二十九日)。体重3kgの丈夫な子でした。

くもえげ、大抵は土の上ではいたタビガ。江戸時代にはウタミの上ではけくまうになつて、と水からまた研ぎかきりたジカウタビかまきて地面にありてきたと、こういうわけやうに、一寸まちいな、甲台点くらあかんかな。江戸時代かてウタミはウタミの上でたけはくもんで、取ったわけやないわん。たとえはウカを律つてたげモノを穿ったウカジヨウか促ったウタビがある。今でも青森や新潟では、世下ウタビのことを、ウカジヨウとか、ウカジヨウとかという人があろうらしいや。それから青森、新潟、長野などのウカジヨウの人、がはいていたウタビは、ウカウタビ、ウカウツとも言うてな、大抵のウタビの名残りや。まだあるで、ウカウカに近いうち、町人かはいたツナヌキといつのもは製ウタビや。江戸時代の大阪、永楽というえらい業者が、ツナヌキは遠く魚いけれど、あちたれくて、そのウカウカはウカウラジヨウか持ちて安くうくから野良仕事にはツナヌキを使ひなはれて、すすめていろいろらしいや。つまり、どういうものかに

ントになつて世下ウタビが出来たんやな。ツナヌキよりけまややく、軽くて丈夫で舌口といふわけや。ソレよって、江戸時代にその地面にジカにはくウタビはあつたんや。どや、今日はええお慶になつたやろ。  
 「何で、いろいろなこと」やんに聞いたそんやから、はむぬのえんれてるうたわ。  
 「睡りないこと言いなや。こつちは一生懸命、眠らんや、せいないやないか」  
 「それよりお、さん、ジカウタビが、ウカウタビか、ど、ちが正しいわん」  
 「それは上のエにジカにはくんやからジカウタビのうのが正しいんや」  
 「よ、んや、こんどおのがキにえうたら、ギヤフンもわくたろ」  
 「まあ待ちな、ジカウタビのちが正しいけれど、チオウタビかておみちとして聞かしてはならんや、ど、ちも日本話として通用してんや、んさかい、そんなことウカウカなさんな。それよりお前さん、地下ウタビ買に行くと申やまうてたけ、お物はすんたんかいな」  
 「ア、こもうた、話に話中なな、て、それをおつかりたわていた」